

ブラツク・ホークから ブリテイッシュ・トラッド愛好会へ

森能文

1970年代初頭、渋谷を經由して新宿の高校に通学していた私は、71年の冬のある日を境に放課後の長い時間を《ブラツク・ホーク》で過ごすようになっていました。

週に2、3回、足繁く通ってはいましたが、レコード・ブースの主であった松平稚秋さんと親しく話が出来るようになったのは、それから3年後の1974年も押し詰まった頃、東野和子さんのバラッド集の制作を手伝い始めた時からです。

彼女は当時よく居た「常連客が高じてスタッフになる」というパターンにはまり、バイトのスタッフとして《ブラツク・ホーク》で働いていました。そして、バイトの時間が引けると、下北沢の《グッデイーズ》という、これまた一風変わったお店で過ごすことが常でした。この店も元々は松平さんの行き着けの店で、東野さ

んも松平さんに連れて行かれて、居着いてしまったという感じだったようです。そんな次第で、店が引けた松平さんと私たちは、当時この店でよく一緒に時を過ごしたものです。

一見の客がほとんど来ないこの店は、常連客とオーナー夫妻とがまるで家族のような関係で、客たちは各々お気に入りのレコードを店にキープしておいて、店に行くと勝手に自分たちの好みの音楽を聴いていました。私たちは松平さんが日本盤のライナー・ノーツを書いたマーティン・カーシーとデイブ・スウォーブリックの『セレクシヨズ』、ディック・ゴーハンの『ノー・モア・フォーレバー』、アーチャー・フィッシャー他による『ザ・フェイト・オ・チャリー』、ニック・ジョーンズのファースト・アルバムなどがお気に入り、皆で一緒によく聴いたものでした。

また、松平さんはデイブ&トニー・アーサーの『ハーケン・トゥー・ザ・ウィチズ・ルーン』の中に収められていた「妖精たちの話」の中に出てくるフェアリー・ジグ、フェアリー・リール、そしてキング・オブ・ザ・フェアリーズというフィドルの曲が特に気に入りで、当時我々の間で唯一のフィドル弾きだった東野さん捕まえては「ねー、ねー、東野さん、キング・オブ・ザ・フェアリーズを奏ってよ!」と言って彼女に演奏させては、うれしそうに聴き入っていました。ジンを生で飲みながら、上機嫌で東野さんのフィドルを聴いている時の松平さんは、ブラツク・ホークのレコード・ブースで挑戦的な視線を客席に投げかけている強面の仕事人ではなく、好きなトラッドを素直に心から楽しんでる1人の音楽好きとして、とても優しくいい顔をしていました。

はじめの英国旅行で トラッドをライブで体験

1975年初頭に、東野さんが出来上がったばかりの手作りバラッド集を携えてイギリス旅行に旅立ちました。彼女の手作りバラッド集はイングリッシュ・フォークダンス・アンド・ソング・ソサエティーの本拠地である、ロンドンのセシル・シャープハウスの図書館に寄贈されたのです。また、彼女は現地でニック・ジョーンズやトニー・ローズなど、当時の我々にとってはまさに垂涎的ともいえるシンガーたちのフォーククラブ・ナイトに出向き、カセットにその音源を納めて帰国。ある時などは、彼女がセシル・シャープハウスでのダンス教室に参加しているまさにその時間に、地下にある「セラー・フォーククラブ」では、ディック・ゴーハンが歌っていたというような土産話を聞いて、私たちの現地の状況に対する羨望の気持ちは嫌が応にも高まったものです。

彼女の英国旅行から2年後の1977年2月、私も生まれて初めての海外旅行として1ヶ月間の英国旅行に出掛けました。トラッドを多く扱うロンドン中心街のレコードショップで、フォ

ーク・クラブ・ライブやコンサートの情報を得ましたそして、そこで近々、ロンドン郊外のある町のホールで、アシユレイ・ハッチングス率いるアルビオン・ダンス・バンドのコンサートが開催されることを知りました。



年には『モリス・オン』をリリースしたアシユレイ・ハッチングスの動向は最も目が離せない所。そんな彼が当時率いて活動していたアルビオン・ダンス・バンドのコンサートとあっては、何があっても駆け付けなくてはなりません。

私は、郵便で予約したコンサートのチケットが滞在していたB&Bに届くまでの間に、『ノー・ローゼス』のアルバムの見聞き一杯に広がる風景写真の場所、アシユレイとシャリーが当時の生活の拠点としていた、南イングランドのエッチングム村をなんとかして訪ねようと思いい立ちました。ロンドンの本屋で買ったロード・マップをめぐって村の場所を探すと、それはドーバー海峡に面した古戦場として有名なヘイスティングスに向かうカントリー・ロードからほんの少し外れた場所にあるようでした。私は早速ロンドンでレンタカーを借りると一路南へ向かいまいした。そして、念願のエッチングム村に到着。アルバムの見開きの写真そのままの風景をしかと目に焼付け、そして、彼らと同じ空気をしっかりと胸に吸い込み、アルビオン・ダンス・バンドのコンサートに備えたのです。

なった当時の一般的なトラッド・ファンにとつて、フェアポート一派の動向は常に最大の関心事でした。中でも、フェアポートとステイラー・イ・スパンを経て1971年にシャリー・コリンズ&アルビオン・カントリー・バンドの名目で『ノー・ローゼス』を、そして、1973

英国旅行の見聞記から テープ・コンサートへ

アルビオンのコンサートは予想に違わず素晴らしいものでした（見聞記は『スモール・タウン・トーク』9号に掲載）。さらに幸運だったのは、コンサートの会場が小さな町の公会堂といった雰囲気フレンドリーな場所だったため、シャーリー&アシユレイとも気安く言葉を交わすことができたこと。2人には、遠い日本にも沢山のファンが居る事を伝えることができただけでなく、日本のファン向けにメッセージをもらうこともできたのです。

日本に帰ってから早速、松平さんと、もう1人当時『コースト・トゥ・コースト』という同人誌の運営メンバーで、ブラック・ホークの常連客の中でもトラッド・ファンとして知られていた遠藤斗志也さんに、このアルビオン・ダンス・バンドのコンサートの音源を聴いてもらいました。そして、3人とも直ぐに「これは我々だけで聴いているのは余りにももったいない」ということで意見が一致。ブラック・ホークで初めての企画として「テープ・コンサートをやるう」ということになったのです。

コンサートの開催については殆ど店内での告



知だけだったので、当日どれだけの人が集まるかは全く予想できませんでした。しかし、驚いたことに当日はなんと50席程のブラック・ホークが満席になったのです。言い換えればそれはブラック・ホークがトラッド・ファンだけで満席になった初めての瞬間だったといえます。

者募集を経て、1977年8月28日(日)にッブリテイッシュ・トラッド愛好会^カの第一回定例会が開催されることになりました。

定例会を開催し、 機関誌『OAK』を発行

定例会の開催に際しては、何かしら機関誌のようなモノが欲しいということになり、遠藤さんが関わっていた『コースト・トゥ・コースト』を真似て、手書きオフセット印刷の僅か8ページの機関誌『OAK・British Trad Review』を発行することになりました。時間も限られていた中、大急ぎでニュースやアルバム・レビューさらにはバラッドやソングの歌詩&対訳などを盛り込んで、私が手書きで書き上げた原紙を遠藤さんの縁の印刷屋さんにオフセット印刷で仕上げてもらい、なんとか第1回定例会に間に合わせる事が出来ました。

そして迎えた記念すべき第1回の定例会。アルビオン・ダンス・バンドのテープ・コンサートの時に続いて再び、日曜日の昼間にブラック・ホークが満席になったのです。その時の様子は第3回定例会に併せて作成・配布された『OAK』2号の巻頭に私は次の様な文章を書きました。

「果たしてどの程度の反応があるか全く見当が

つかないままスタートした、ッブリテイッシュ・トラッド愛好会^カでしたが、全く予想外とも言える程の反響があり、北は北海道から、南は九州まで、日本全国から沢山にお手紙を頂き、

日本にもこんなに沢山ブリテイッシュ・トラッドを好きな人が居たのか、と今さらながら驚いている次第です。定例会の方も、現在まで2回共ブラック・ホークが満員になるという盛況をみせ、会員による演奏も聴ける様になり、これから先がますます楽しみという所です」

私にとつての ブラック・ホーク時代の終焉

こうして始まったブリテイッシュ・トラッド愛好会の定例会は、1977年8月の第1回定例会から1982年2月の第54回定例会までの5年弱、毎月最終日曜日の昼間にブラック・ホークで開催されました。店の都合によりブラック・ホークでの開催が出来なくなったそれ以降

は両国のフォークロア・センターに会場を移して開催され続けましたが、その活動は徐々に細りになり、機関誌『OAK』は1984年8月の27号が最終号となりました。

一方、あくまでも音源を聴くことがメインであった定例会に代わる形で、演奏をメインにした集まりが、トラッド愛好会の一部のメンバーの働きかけにより、新宿の「かしわホール」というマイナーなホールを会場にして開かれるようになりました。第1回は1984年5月3日。以降、原則的に毎年5月3日と11月3日を定期的開催日として、1997年まで13年間続けられたこの集いは、ある意味では《ブラック・ホーク》を拠点としてスタートした「ブリテイッシュ・トラッド愛好会」の正常な発展形と言えるでしょう。

ところで、ブリテイッシュ・トラッド愛好会設立の象徴であった松平さん自身は、皮肉にも愛好会の第1回定例会を目前にした1977年

7月に《ブラック・ホーク》を去られていました。そして、その年の11月からは原宿の音楽図書とレコードの販売店《OAK》の店長を務められるようになったため、私たちトラッド愛好会の会員たちは、毎回、定例会が終わったその足で《OAK》に向いて、松平さんの顔を拝むことを常としていました。

その一方で、私自身はそれまで週3回は通っていた《ブラック・ホーク》に、定例会以外の日に単なるお客として出掛けることは全く無くなりました。松平さんの居ない《ブラック・ホーク》は、私にとってはもはや以前のブラック・ホーク^カではなかったからです。

いま振り返れば、私にとつての「ブラック・ホーク時代」は、ある意味では「ブリテイッシュ・トラッド愛好会^カ」の設立の時点で終焉を迎えていたとも言えるのです。

(ハイランド・バイバー)